

翻訳原稿作成に関する覚書

西山雄二（首都大学東京）

以下に記したのは、フランス語の思想系のテキストを翻訳して、原稿を作成する上でのルールに関する覚書である。ただ、翻訳原稿にかぎらず、出版に関するより一般的なルールや慣例でもある。「～がよい」という箇所は西山の個人的な見解を示している。作成にあたっては、宮崎裕助氏（新潟大学）や小林浩氏（月曜社）らの協力を得た。感謝申し上げる次第である。

翻訳作業の基本

- ・ 訳稿は首尾一貫した書式で作成する。ちぐはぐなフォントとその級数、不規則な行間などは整理しておく。一般的なフォント（MS明朝／Times New Roman）で、10Qサイズ（註は9Q）、行間1.0で統一するとよい。
- ・ ワード独自のさまざまな装飾（ルビ、下線、傍点、太字など）は使用せず、プレーンテキストで訳稿を作成した方がよい。DTPソフトでは必ずしも的確に反映されないためである。
- ・ 訳稿を作成する際は、訳し漏れがないように注意する。見直しの際、訳されたものを検討することはたやすいが、欠落して何もない状態だとさらに見落としてしまう可能性がある。
- ・ 訳稿では下駄記号■を活用するとよい。あとで調査して情報（頁数、巻数、年数など）を追加する場合、表現しにくい文字（ギリシア語や特殊記号など）をゲラ段階で手書きで追加する場合である。
例：『リヴァイアサン（■）』水田洋訳、岩波文庫、■年、■頁。
- ・ 記号（中黒・やハイフン - など）を使用する際は、日本語で的確に訳出できるかどうかを検討する。「や」「と」「と同時に」「あるいは」「もしくは」「また」などの日本語でなるべく表現し、記号に安直に頼らない。記号はいかようにも解釈さ

れうるので、意味が曖昧になるからである。

- ・ 訳稿ファイル名の管理は非常に重要である。ファイル名には必ず日付を入れる。改訂した場合、上書きしないで別のファイルとして管理した方が新旧ファイルを取り違えずに済む。

例：存在と時間_180906

- ・ 共訳の場合、訳稿を一度完成させた後はマスターファイルをひとつにして、共同作業を進める。共訳者が個々に複数のファイルで同時に作業すると、訳稿の整合性がとれなくなるからである。

約物の処理

- ・ 原則として、原文における引用符 « » は鉤括弧「」で表す。
- ・ 原則として、大文字は山括弧〈〉で表わす。ただし、慣用で頭文字が大文字で表記されている場合は、山括弧は使用しない。

例：Dieu → ○ 神 × 〈神〉

また、成句や語句のまとまりを示すために、山括弧や鉤括弧が使用される。

例：Sein zum Tode → 〈死へ臨む存在〉

le dire et le dit → 〈語ること〉と〈語られたこと〉

- ・ 丸括弧（ ）はそのまま表示する。欧文では半角丸括弧 () だが、日本語訳文では全角丸括弧 () となる点に注意。参考文献などで、欧文のなかに出てくる場合は、半角丸括弧 () のまま表記する。
- ・ 亀甲括弧〔 〕は原綴りを挿入するため、また、日本語訳書の書誌情報や訳者による補足・説明を表わすため、訳者が補足説明をおこなうために用いる。

最初の訳稿では、気になる言葉や表現については、原綴りをなるべく挿入しておく方がよい。見直す際に実用的で、原綴りはあとでいくらでも削除することができるからである。

括弧のなかに原綴りを示す亀甲括弧を置く場合、終わり括弧の前に入れるか、

括弧の後に置く。例：「他人〔autrui〕」／「他人」〔autrui〕

- ・原著者による挿入を示す角括弧〔 〕はそのまま表示する。欧文では半角角括弧〔 〕だが、日本語訳文では全角角括弧〔 〕となる点に注意。
- ・原文における斜線 / はそのまま表記する。欧文では半角 / だが、日本語訳文では全角 / となる点に注意。
- ・ダッシュ類は、音引き（長音符）、全角ダッシュ、半角ダッシュ、全角ドリ二分ダッシュ、欧文シングルハイフン、マイナスなど、さまざまな類似記号があるので変換には注意し、訳稿のなかで表記法を統一させる。

原文における半角ダッシュ - はそのまま表記する。また、区間や範囲を表す場合、単語間の関係性（並列、対照、方向、対立）を表す場合にダッシュを使用する。

ダッシュは表示がフォントに依存する記号で、ゲラ校正の際に見落としやすいので、訳稿では隅付き括弧に入れて【-】と表記しておくといよい。

例：La question théologico-politique → 神学【-】政治的な問い

- ・二分二重ダッシュ = は、言語に対して複数の翻訳可能性がある場合に、訳語の両義性を示すために用いられる。二分二重ダッシュ=は、表示がフォントに依存する記号で、ゲラ校正の際に見落としやすいので、訳稿では隅付き括弧に入れて【=】と表記しておくといよい。

例：la fin → 目的【=】終焉 le jeu → 賭け【=】戯れ

ただし、二分二重ダッシュ=を使用しすぎるとあまりに冗長で文章がもたついてしまうので、より適切な訳語で訳出しておいて、他方の両義的な意味を参考程度に亀甲括弧に入れてもよい。

例：la fin → 目的〔終焉〕 le jeu → 賭け〔戯れ〕

- ・括弧がいくつか連続する場合、あいだに読点を打つか打たないかを決めておく。
- 例：「神」「人間」「動物」／「神」、「人間」、「動物」

イタリック体

・イタリック体にはいくつかの含意があり、それぞれ次のように処理する。

- ①強調：傍点で強調する。縦書の強調では「泪点／黒ゴマ、」を用い、「黒点／黒丸・」は原則的に用いない。訳稿では、ワードの傍点や下線を使用せず、【 】を用いる。

例：Il ne peut y avoir de paix durable *sans justice*.【正義なき】平和は存続しない。

- ②作品名：二重括弧『』（書名や映画の題名）や一重括弧「」（定期刊行物の題名）に入れて表記する。

例：Discours de la méthode『方法序説』 Les Temps modernes「レ・タン・モデルヌ」

- ③フランス語以外の言語（ラテン語など）：傍点で強調はしないで表記する。原綴りを挿入する場合、イタリック体を正体に戻して表記する。フランス語使用者に対して外国語であることを示しているだけなので、日本語使用者に対してイタリック体にする意味がないため。また、ラテン語はカナ表記しない。かつてラテン語はどんなに長文でもやたらにカナ表記で訳出していたが、その傾向は減っているようだ。

例：Fiat lux → ○光あれ〔Fiat lux〕×光アレ Dasein → 現存在〔Dasein〕

- ④単語の提示：一重括弧「」にて表記する。

例：Le mot *amour* est… → ○「愛」という言葉は… ×【愛】という言葉は…

註の表記

・註には、原著者による註、訳者による訳註、编者による編註がある。

本来的には、ワードの文末や文末脚注を使用せず、プレーンテキストで、註番号を【1】【2】と挿入し、註原稿を別ファイルで作成することが好ましい。ワードの脚注機能や文末注機能は、DTPでは反映されないためである。

・書誌情報の日本語訳を亀甲括弧で入れる場合、以下のように記す。ピリオドのあとに亀甲括弧を入れ、句点を打たない。

例：Emmanuel Lévinas, *Totalité et infini*, La Haye, Martinus Nijhoff, 1974, p. 29. [エマニュエル・レヴィナス『全体性と無限（上）』熊野純彦訳、岩波文庫、二〇〇五年、九六頁]

亀甲括弧のあとにピリオドを打つやり方もあるが、やや不自然に映る。

例：Emmanuel Lévinas, *Totalité et infini*, La Haye, Martinus Nijhoff, 1974, p. 29 [エマニュエル・レヴィナス『全体性と無限（上）』熊野純彦訳、岩波文庫、二〇〇五年、九六頁] .

書誌情報の直後に日本語の文章がくるときは、やむを得ず句点を] のあとに入れるとよい。

例：Emmanuel Lévinas, *Totalité et infini*, La Haye, Martinus Nijhoff, 1974, p. 29. [エマニュエル・レヴィナス『全体性と無限（上）』熊野純彦訳、岩波文庫、二〇〇五年、九六頁]。ここでレヴィナスが強調しているのは…。

- ・書誌情報の日本語訳で分冊の場合、巻数は『』のなかに入れるか、外に置く。現物の表表紙や扉、奥付をそのつど確認して表記法を判断するとよい。あるいは、訳稿のなかで表記法を統一した方がよい。註の文末では句点を打つ。人名の略号は全角で表示する。

例：マルティン・ハイデガー『存在と時間（一）』熊野純彦訳、岩波文庫、二〇一三年。

G・W・F・ヘーゲル『精神現象学』上巻、樫山欽四郎訳、平凡社ライブラリー、一九九七年。

- ・全集や論集に収録された論文を参照する場合は、なるべく論文の訳者名を表記する。
例：ハンナ・アーレント「真理と政治」斎藤純一・引田隆也訳、『過去と未来の間——政治思想への八試論』所収、みすず書房、一九九四年、三〇七頁。

全集名を表記する場合、その位置については、訳稿のなかで表記法を統一した方がよい。

例：『精神の現象学 上巻』金子武蔵訳、『ヘーゲル全集4』、岩波書店、一九七一年。

／『ヘーゲル全集4 精神の現象学 上巻』金子武蔵訳、岩波書店、一九七一年。

／『精神の現象学 上巻（ヘーゲル全集4）』金子武蔵訳、岩波書店、一九七一年。

- ・日本語訳書が複数存在する場合、どの訳書を選択するかは訳者の判断に委ねられる。例えば、一般読者もアクセスしやすい文庫版にするか、最新の研究を踏まえて訳出された全集版にするか。
- ・訳註は読者の立場、読書のリズムを想定して、文字数や内容を十分に考慮した方がよい。訳註は訳者の冗漫な勉強ノートではないし、専門的知識を不必要に学術的に披露する場でもない。一般向けであれば短めの訳註を適宜配し、専門書であれば、参照されている書誌情報などを緻密に調べた訳註をおく。

漢字の変換

- ・個々の漢字の変換方法は統一し、表記ゆれを避ける。

未来社HPでの「編集用日本語表記統一基準」<http://www.miraisha.co.jp/mirai/archive/touitsu.html>、日本エディタースクール『日本語表記ルールブック』、共同通信社『記者ハンドブック』などを参考にして、自分なりの変換ルールを決めておく。

- ・ひらがな書きが適当な語は漢字を開いておく。

*副詞：つねに（常に）、すでに（既に）、いまだ（未だ）、ぜひ（是非）、とくに（特に）、あらためて（改めて）、たしかに（確かに）、きわめて（極めて）、すべて（全て）、なんら（何ら）、もっとも（最も）、たとえば（例えば）、たびたび（度々）、いっそう（一層）、はたして（果たして）、まず（先ず）

*接続詞：したがって（従って）、および（及び）、すなわち（即ち）、たとえば（例えば）

*抽象的、具象的な語句どちらにも用いられる動詞

いう（言う）、もつ（持つ）、みる（見る）、みえる（見える）、おこなう（行う）、わかる（分かる）、よる（因る）

ただし、具体的に誰かが喋る、形のあるものを持つ・見るといった場合は、漢字を使用する。

*助動詞、補助動詞：～できる（出来る）、～うる（得る）、～ください（下さい）、～いたします（致します）、～いただく（頂く）

*形式名詞：こと（事）、もの（物）、とき（時）、ところ（所）、ため（為）

「～すること／事の重大さに～」など、別の語句を受ける場合（形式名詞）は開くことが多く、単独の名詞として用いる場合（実質名詞）は漢字を使用する。

*副助詞：など（等）、まで（迄）、ほど（程）、くらい／ぐらい（位）、たび（度）

*数や状態を表す名詞、副詞、形容動詞：さまざま（様々）、いろいろ（色々）、すべて（全て）、たくさん（沢山）

・人称の表記を統一する。

例：私↔わたし 我々↔われわれ 私たち↔わたしたち

・縦組みにおける漢数字は、「トンボ十」という単位語を入れるか、数字を並べるか、いずれかの方式を決めておく。

例：二〇一八年八月一日 五〇歳 一九世紀 / 五十歳 十九世紀

・縦組みの場合、上下ではなく前後の構造になっているので、次のように表記する。

例：上記→前記 下記→後記 上掲→前掲 上述→前述

カナ表記

・訳稿では、ワードのルビ機能を使用せず、【 】を用いて指示する。ルビ（振り仮名）は、元の外来語の発音を提示したい場合、原語の音の響きの類縁性を示したい場合に用いる。ただし、感覚的にやたらとルビを付けることは避け、原綴りの挿入で済ませた方がよい。

例：hiérarchie →【階層秩序：ヒエラルキー】 fantasme →【幻像：ファンタスム】

○ 赦すこと〔pardonner〕とは贈与する〔donner〕ことの…

×【赦すこと：パルドネ】とは【贈与する：ドネ】ことの…

○ とらえること〔prendre〕は了解すること〔comprendre〕の…

×【とらえること：ブランドル】は【了解すること：コンブランドル】の…

・親字に対して長すぎるルビ（1文字の親字に対して4文字以上のルビ）は推奨されない。また、級数が小さくなって読みにくいので、註内のルビも推奨されない。

・フランス語以外の鍵語や専門用語はそのつど検討して表記法を決定する。

- ①カタカナ表記のみ 例：cogito → コギト logos → ログス
- ②カタカナ表記〔日本語訳〕 例：zōon → ゴーオン〔生きもの〕
- ③原綴り〔日本語訳〕 例：Dasein → Dasein〔現存在〕 il y a → il y a〔イリヤ〕
- ④日本語訳〔原綴り〕 例：Dasein → 現存在〔Dasein〕 il y a → イリヤ〔il y a〕
- ⑤日本語訳+カタカナ・ルビ
例：Dasein → 【現存在：ダーザイン】 il y a → 【ある：イリヤ】
- ⑥日本語訳+カタカナ・ルビ〔原綴り〕
例：Dasein → 【現存在：ダーザイン】〔Dasein〕 il y a → 【ある：イリヤ】〔il y a〕

・フランス語をカタカナ表記する場合、フランス語読み、英語読みのどちらにするのかを統一する。

例：セミナー／セミナー コロック／コロキウム イマージュ／イメージ
ウィ／イエス ノン／ノー コミュニカシオン／コミュニケーション

専門用語として定着している表現に関しては、フランス語読みがよい。

例：エクリチュール、ディスクール、シニフィアン、シニフィエ

・人名が苗字しか記されていない場合、初出時に名前を補足すると読者に有益である。

例：〔ジャン＝リュック・〕ゴダール